

## あの日あの時

このごろ、自分がつくづく父に似てきたと思う。洗面所で鏡を見るとときなど、父に会ったような気がして、思わずはっとすることがある。

似てきたのは顔だけではない。いろいろな物事に対応する考え方までそっくりではないかと思うようになった。

復員したころは「生死」について深く考えることもなかったが結婚して子供が生まれると、何としても妻や子のために生きていこうと決意し、簡単に死ぬわけにはいかないと思うようになった。

病気になるたことのない人は、病人の苦しみはわからないという。それはおそらくそのとおりに違いがない。

富める人は貧しい人の気持ちはわからないだろうし、親の気持ちも子は本当の意味で理解できないだろう。

う。

だれの身にも、死はひとしく訪れるものである。しかも、それはいつとも知れぬものなのに、私たちは、とかく死について深く考えることを恐れて避けたり、あるいは生きることの忙しさにまぎれて忘れていたりする。考えたくはないことだが、死について話し合うなど、どうも縁起が悪いと敬遠されがちだが、親子も夫婦も兄弟姉妹も、どのような運命のいたずらで、永遠に会えなくなってしまうかわからない。

いままで、かなりの知人が、この世を去って逝った。

知っている人が死ぬ度に、自分のまわりに一つずつ風穴があいていくような寂しさととられる。だが同じ知人の死でも、自分と同年代の人の死は、単なる寂しさをこえて、ついにわれわれもそんな年齢になったのかという感慨にとられる。まだ遠いと思っていた死が、近くにきていることを自覚させる。

かつて、戦時中自分たちはいざれ間近に死ぬものと覚悟していた。自分の二十歳から先の生を想像することはできなかった。今このときしか自分たちの生はないという覚悟をせざるをえなかったのである。そのため当時のことは今でも痛切な記憶として残っている。

わたしたちの世代はまだ戦争による犠牲者の思い出を持っているからいいが、その者たちが次第に消えていったら、もう死者にとつてこの世に知っている人間はいないわけである。化けて出ようにも出る先がないので、戦争の記憶はそこで絶えてしまうのであるうか。

青年期をようやく迎えた程度の自分たちは、激しい日夜の訓練に疲れ、強い郷愁をおぼえたものである。日本が敗戦という奈落へ急速に転がり落ちていく事情などまったく知ることもなく、ただひたすらに勝

利を信じていたのである。

海軍工廠に勤務していた当時、ある海軍将校が私にこんなことを笑いながら言った。

「木寺が戦争に行くことになったら、日本もしまいじゃな」

それから数日後、私に召集令状がきて、職場でちよつとした話題になった。

現在は赤紙一枚で召集されることもない。機関銃や小銃の弾もとんでこない。爆弾も落ちてくる心配もない。竹槍(たけやり)で本土決戦にそなえる必要もない。この点では平和といえるだろうが、最近の暗いニュースの連続で気が重い。この世の中が将来どう変化していくのか、皆目見当がつかず、不安な日々を送っている人は多い。

桜の花というのは、花のひとつを手にとつて見ると、淋しい感じのするものである。それが群をなしてたくさん咲くと圧倒的な美しさを感じさせるが、散りゆく様を見ると何かはかない思いがするものである。若いころは生きるのに忙しくて花に心をやる余裕などなかったが、人生の半ばを過ぎたころから毎年春になると自然に花が待たれるようになった。

日の浦公民館の前に見事な桜の木がある。三十九年間、地区の人たちの喜びや悲しみをじつと見ていた桜である。

町長の田中さんが若かったころ(昭和三十四年)日の浦を去るに当たって、名残りを惜しみつつ植えたものである。

四月の地区の総会の度に、咲き誇っているこの桜を見ながら、はたして来年もまたこうして花を見るこ

とができるか、という思いがきざしてくる。

花二逢フコト、アト幾回ゾ (蘇東坡)

という気分になっているのである。

「貴様と俺とは同期の桜」

戦中派の男性たちが酒を飲んでよくうたった歌である。

「咲いた花なら散るのは覚悟」

「みごと散りましょ国のため」

この歌の背後には別れとか、散るといった心情がある。多くの若者がこの歌をうたって、死地へ向かって行ったのである。

これらの多くの尊い犠牲の上に、今日の社会はあるのだ、ということを経験した人々にわかってもらえたら、散って逝った人たちの何よりの供養になるのではないだろうか。

桜はわが国の代表的な花とされてきているだけに、文学・美術その他の風俗に数かぎりなく現われている。らんまんらんまんと咲いたのちは未練なく散りはてる桜の花の特徴は、国民性の形成に、大きな影響を与えたのである。古来桜に関する物語・伝説は枚挙にいとまがない。

私たちは実にさまざまに別れを経験している。何でもない一時の別れと思っていたものが、そのまま永遠の別れとなってしまう場合もある。

去つて行くものが自動車、電車、飛行機などの場合はお互いの姿が早く見えなくなり、その場合はあっさりとは済まされることになる。だが船が出て行く時は、実にゆっくりと港を離れて行き、寂しい感じを強く味わうものである。

中国の詩によくある別れも「野崎村」のおそめ久松にしても舟が使われている。別れというものは、生別にして死別にせよ、こよなく悲しいものである。

昭和十七年十一月十七日の夕刻、私たちの部隊が乗船した輸送船マニラ丸（二万トン級）はラバウルに向かって宇品港の岸壁を静かに離れようとしていた。

演説好きの古参の兵長が、われら初年兵を甲板上に集めて、「お前ら、よく見ておけ、これが内地の見納めになるぞ、まさか生きて帰れるなどと思っている奴はいないだろうな。生きていてもたいして役に立つようなお前らではないから、南方の海の魚の餌食にでもなれば、名誉の戦死ということになり、親孝行ができるというもんだ。親より先に死ぬのはちよつと辛いかも知れんがそれが戦争というもんだ。わかつたか、ようし休憩」そう言つて胸を張つた。半ばやけ気味のようにとれた。

背後の足音に気がついたのでそのあとだった。温厚な隊長がやつて来て「おい木寺」と言つて岩壁の左側方向を指差した。疲れてかすんだ眼をこすり、じつと見ていた私はアツと驚いた。思いがけない父の姿があつた。船の出航は軍事機密である。どうして父が見送りに来られたのか、私は呆然となつた。

隊長の特別の計いであると気付いた。将校と兵隊という関係を抜きにして、私はこの隊長が好きで、人間の魅力を感じていた。われわれの部隊はこの隊長の的確な判断で死地を脱したことが度々あつた。復員

後もずっと交友が続いたが、その彼も先年亡くなり寂しくなった。

岸壁にはほかに人影はなかった。世間知らずの取柄のない末っ子の私との最後の別れに、日々の生活も決して楽ではないのに、福島からはるばるやって来たのである。

宿はどうしたのだろうか。駅の待合室で一夜を明かすのだろうか。そんな思いで胸がつまった。

これで二度と父に会うことはないだろうと思い、父と過ごした日々が堪えがたいほどあざやかに胸によみがえってきた。

父は数年前から時折身体の不調を訴えることがあった。いつまでも元気だと思っていた父は、確実に老いていることを、その姿に見せていた。わたし達父子は、遠くからではあったが見つめあい、無言のまま相手の心中を思い遣った。

かつて私を優しく戒めた父親の姿が一気に浮かび、親孝行らしいことは何一つしなかったことが悔やまれてならなかった。

父にもいろいろ異なる人生の起伏があったに違いない。あと何年父は生きられるだろうか。不意に私の唇はふるえ涙が頬を濡らした。

私の姿が眼に入ったのであろう。父は挙げた片手を力なく振った。隠し切れない疲労を体に見せていた。やがて引きずるような足どりで父は岸壁から離れて行った。戦時中とはいえ、こんなに強烈な感動で涙と共に見送ったのは初めてであった。青春の感傷というにはあまりにも生々しく、私の脳裏に焼きついて消えることのない別れであった。

遠ざかる父の背に、その日はじめての陽の光りが静かにさしかけて来た。

今は死んでこの世にいない父に、この時の気持を尋ねることはできないが、それ以来、港を離れていく大きな船を見ると、あの日あの時の夕陽を背に浴びた寂しげな父の姿が目に見え、目頭が熱くなってくるのである。

